

## 令和元年度第2回三重県少子化対策推進県民会議 議事概要

日時：令和元年10月18日（金）14:30～16:30

場所：三重県勤労者福祉会館6階 講堂

### 【出席委員（敬称略）】

浅尾美和、江藤みちる、岡本陽子、紀平正道、久保行央、坂下啓登、杉浦礼子、鈴木照美、田部眞樹子、中井健治、二井睦、西本亜裕子、福田圭司、藤谷俊文、山田朋子、鈴木英敬、伊藤公則（金森委員の代理）、落合知（下角委員の代理）、清水篤（館委員の代理）、

会議では、次期スマイルプランの策定に向けて、事務局（県少子化対策課）から資料に基づき説明したあと、県民会議のもとに設置している計画推進部会での議論の状況を杉浦部会長より説明していただきました。その後、各委員から、近年の社会経済情勢や問題意識等を踏まえ、次年度からの5年間で必要な取組項目や、特に注力して取り組んでいくべき取組内容等についてご意見等をいただきました。

各委員の主な発言概要は以下のとおりです。

### ○西本委員

- ・子どもがいてもバリバリ仕事を続けていきたいという人もいれば、仕事をセーブしたいという女性もいる。本人の意向を聞かないまま、子どもがいるから仕事に制限があるなど、女性という枠組みで物事を勝手に進めてはいけない。

### ○山田委員

- ・働きながら子育てをするうえで重要項目は2つ。1つは保育所と放課後児童クラブの充実。2つ目はハラスメントのない職場である。必要なときに気兼ねなく休めることが大事。
- ・育児休業取得に関して、今持っている仕事をどうするか、誰に引き継ぐか、育休明け後に会社に自分の居場所があるか、女性たちが昔から今も直面している問題である。今後は男性の育休取得が増えてくると思うが、同様の問題に男性も直面する。

### ○浅尾委員

- ・店舗で提示すると特典が付く子育て応援クーポンはお得感を感じるとともに、子育てを応援してもらっている気持ちになる。このような制度があることは子どもを持って初めて気づいたが、独身者を含めて多くの人に子育てが楽しいと分かる機会があればよいと思う。

#### ○藤谷委員

- ・保育士の確保が難しいなか、保育士に負担をかけないように、朝の子どもの受け入れや夕方の方の親への引き渡し、清掃などは、一定の研修をしたうえで保育士以外の職員がするなど、保育所もいろいろ考えながら子どものためにやっていきたい。

#### ○二井委員

- ・幼児教育・保育に関して学んだ学生が、就職において一般企業に流れる部分がかかなりある。養成校を卒業した保育士、幼稚園教諭が必要なところ（幼稚園、保育所等）へ行けるよう、保育協議会と歩調をあわせて活動していきたい。

#### ○中井委員

- ・子どもの養育者は実の両親だけではなく、祖父母、地域の人々、専門家などがおり、そうした多くの養育者がより良い子どもの育ちを求めて集う場所を増やしていくことが必要。子どもの育ちや人とのつながりに関する哲学は世代間で違い、以前より人との関係の強さ、影響力は弱まっている。そうした世代間の価値観の違いを受け入れられる場、広い意味での養育者の学びの場を模索していく必要がある。

#### ○久保委員

- ・多気町では児童館をつくり、放課後児童クラブ、子育て支援センター、相談サポート事業を行っていたが、利用者が増え、3年ほど前から放課後児童クラブはパンク状態で、移転したところ。
- ・町内にアクアイグニスができるにあたり、多くの従業員の確保が必要で、空き家を活用して若い世代に住んでもらえるよう取り組んでいる。

#### ○紀平委員

- ・少子化対策のためには、出産年齢を下げなければならず、ライフプラン教育が重要となる。すぐに結果は出ないため、10年先を見据えて取り組む必要がある。
- ・不妊治療に関するアンケート結果では、仕事を休めないという声が多い。企業のトップの理解が必要だが、産婦人科医会では難しいので、県から働きかけをお願いしたい。
- ・周産期医療に関して、新生児用の救急車「すくすく号」が県内で一台しかなく、津市内でも準備等を含めると到着まで1時間かかる。また、新生児専門の小児科医も少ない状況である。

#### ○鈴木委員

- ・交際相手がいる学生のほうが将来の展望を考えている場合が多いと感じる。自分のライフプランにあった妊娠、出産を考えるにあたり、20歳くらいで交際相手がいることが望ましいと感じる。また、産後に孤独感を感じた人に話を聞くと、行政が支えてくれている安心感があれば、もう一人産もうと思うとのことであった。

#### ○坂下委員

- ・商工会の会員は家族だけや従業員数名など4～5人の規模の会社が多い。経営者夫婦と従業員数人の場合、従業員に有休をとらせると経営者が働かなければならなくなることから、事業を継いだ経営者の子どもが、自分の子どもの面倒をみられないなど、事業継承にも問題がある。
- ・少子化対策では、まちづくりやコミュニティづくりから考える必要があり、子どもが遊び、シニアも集まれる場所に商店もあるようなまちづくりを考えていきたい。

#### ○田部委員

- ・虐待やいじめの問題は、対症療法的なことだけでなく、いじめる側や虐待をする親のことも考え、長い目で対策を考えなければならない。子どもに家族とは何かと聞くと、一緒に生活することと答えるが、ごく一般の家庭で実親が本当に一緒に生活できているかなど、家族の形を見直す時期に来ていると考える。

#### ○福田委員

- ・現行の子どもスマイルプランにも記載があるが、家族をどういうふうに捉え、子どもの育ちや成長を見ていくかは非常に大事な視点なので、行政や多様な主体がどのように行動していくかを含め、次期プランでも触れてもらいたい。
- ・次期プランでは縁やつながりを重視することだが、キャッチフレーズだけに終わらず、上記同様、事業としてどのように組んでいくか、工夫してもらいたい。

#### ○岡本委員

- ・次期スマイルプランの重点的な取組「発達支援や医療的ケアが必要な子どもへの対応」について、「対応」は今でも実践されているので、「支援の充実」や「推進」などの文言を入れるべきである。
- ・発達障がいで一括りになっているが、なかには、分野においてたぐいまれな才能を持つサヴァン症候群などの子もいる。地域には発達障がいがあっても素晴らしい子がたくさんいるということを情報発信するとともに、次期プランの中に子どもたちの能力について「一人一人の持てる力を見いだし引き伸ばす」とした文言が入っているとよい。

#### ○江藤委員

- ・最近の学生は、仕事と家庭・子育ての両立ができるかということに不安を抱いている。ライフデザインの促進は重点を外れても長い目でやっていくことが必要。
- ・普通に子育てするだけでも大変なのに、発達障がいや医療的ケアが必要な子が増えている。県がサポートするということを明確に情報発信することが、子どもを持つという行動につながる。

○伊藤委員

- ・就職氷河期世代の問題では、不本意非正規で働いている人が多く、結婚したくてもできない。県の重点的な取組でも、絵に描いた餅にならないにしていきたい。
- ・保育と放課後児童クラブの運営は、父母で運営しているなど地域によってまちまちで、預ける側も、預けられる側も苦労しているため支援が必要だと思う。
- ・「縁」や「協創」の視点はよい。さまざまな場面につながって、お互いを認めて手を差しのべ合う、担い手であり支え手ともなるような仕組みが何かできないか。

○落合氏（下角委員の代理）

- ・厚生労働省では、男性の育児休業取得にかかる助成金について、労働者への積極的な勧奨を行った場合の加算措置を設けたり、総合的なハラスメント対策を推進したりすることを来年度予算要求しており、関係機関と連携して働きやすい職場づくりを支援したい。

○清水氏（舘委員の代理）

- ・男性は女性に比べ、子育てにかかる友だちづくりが苦手である。男性の育児参画やイクボスなどの取組を強力に進め、10年など長いスパンでやっていくと、男女共同参画が進むのではないかと思っている。また、官製でもいいので、男性の子育てを応援する団体がいっぱいできて連携できれば、情報発信の面でも強力なアピールになるので、そういう支援ができないかと思っている。